

はじめに

本書のタイトルにある「キューバ芸術音楽」というフレーズから何が連想されるだろうか。世界的に知られるブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブのような「ポピュラー音楽」の存在が思い浮かぶかもしれない。それとも近年ピアノ小曲への注目が集まるキューバの作曲家エルネスト・レクオーナや、多くのギター曲を創作し続けるレオ・ブローウエルの曲が思い起こされるかもしれない。あるいは一〇〇年以上つづくキューバ国立交響楽団に、かつてカラヤンやミュンシュといった名指揮者たちが訪れていたことを耳にしたことがあるかもしれない。確かにキューバ芸術音楽は、あまり広くは知られていない意味深い歴史物語を持ち合わせている。しかし本書では、そうした個別的な作品や経緯のみを精査するよりも、むしろ芸術音楽の実践が人々の「生」と深く結びつくダイナミズムを、「生きていく音楽」として描くことを目的としている。

カリブ海に位置する島国の一つキューバ共和国は、ボレロ、ルンバ、アフロ・キューバンをはじめとする様々な音楽を発展させた音楽大国として知られている。それらの音楽の特徴は、西アフリカとヨーロッパの音楽を融合さ

せた独自の伝統が息づいていることにある。ただし一般的に「キューバ音楽」と言えば、それはポピュラー音楽を指す場合が多く、芸術音楽の存在はそれほど認識されてはこなかった。

筆者は二〇一一年以来、このキューバ芸術音楽をめぐる、ハバナの「生」と「音楽」の動態を明らかにしようとしてフィールドワークを重ねてきた。なかでも印象的だったのは二〇一三年四月、キューバ国立芸術大学で行われた「指揮法」(オーケストラ・ディレクション)の授業での出来事だった。しばしば指揮法の授業ではオーケストラが演奏する部分を二台のピアノで担うようにアレンジして練習するが、国立芸術大学の場合は、それを二台の電子ピアノで代用している。指揮をする学生は電子ピアノの間に置かれた指揮台に立ち、前方の壁一面に掛けられた鏡を見ながら自分のフォームを確認する。教師は鏡の近くに座り、いかにオーケストラを導くのかを彼らに伝授する。

その日の教室には、教授のロベス、二人のピアノリスト、二人の学生、そして筆者がいた。ロベス教授は「見て！」と学生たちに言うと、腕を上げて指揮を始めた。電子ピアノ二台がそれに続いた。……突然、片方の電子ピアノの音が途絶え、その場にいた誰もがピアノ奏者のセサルに目を向けた。セサルは、鳴らない電子ピアノを右手で弾き続けながら、左腕を振り上げた。そして躊躇うことなく「ガン！」と電子ピアノを叩くと、その衝撃のためか音は回復を見せた。しばらくすると今度は外から、「スコココココン！」というコンガの鋭い連打音が響き渡った。打楽器科の学生が隣で練習をし始めたようだった。こうした突発的な出来事のなか、しかしロベスは指揮を止めることなく、腕を振り続けた……そして最後の劇的なユニゾンを、息をそろえて終えるやいなや、「見たでしょう！ これだよ、これ！ (Viste! ¡Eso!)」と声を上げた。学生たちは興奮した面持ちで何度かうなずいた。筆者も他の学生と同様に、大きくうなずきながら拍手を送っていた。

このとき、私たちは何を経験したのだろうか。なぜロベス教授の言葉に、筆者は大きな拍手を送ったのだろうか？ その場に生じていたのは、オーケストラやピアノを代用した電子ピアノ、しかも電気システムのトラブルから音が途絶

えることがある楽器、音を出さない指揮者、外部から乱入してきたパーカッションの音だった。どこにも「オーケストラ音楽」で実際に鳴らされるような音は存在していない。それでも確かに、そこには音楽の感動といったものがあるようだった。これと類似した場面は、フィールドワークでしばしば遭遇したものであり、本書のなかでもくりかえし登場することになる。だがそうした場面と出会う度に、その見え方が異なってくることを読書は発見するのではないだろうか。

本書では、こうした音楽の経験を探求することを目的として、フィールドワークの過程で聞かれた挿話、人々の些細なやりとりや振る舞い、内的経験やその変化、潜在的な揺れ動きに焦点を当てていく。実にさまざまな場面や出来事を、本書では「音楽」「社会」「文化」といった枠組みに集約せず、ゆるやかな全体として記述することを試みたい。この作業を通して、ハバナの「生」と「音楽」の動態（本書のなかで述べるような、彼らが「生きていく」と表現するもの）が明らかにされるはずである。